

ぬま、夜が明ける、朝早く起き、おみやげにお餅を戴き、心は、はずみ本当に子供だと思えます。気持は我が家に飛んでいました。

このような苦勞、今は昔話のようにでも忘れることなく四十数年、私も縁があつて昭和二十八年結婚をし、三人の子供にも恵まれて、主人も定年退職をし、主人の年金で生活しております。今は幸せな生活だと自分ながら思つて居ります。

あのあと父は小さな漁船で父の兄弟と親と密航をして来ましたが、其の間の毎日、毎夜港を眺めて今日か明日かと待つておりました。

体一つで引揚げたその父も今では何んの補償も戴けずして他界しました、母が生きている中にくらかでもと望んでおりますが、戦争の犠牲とはこんなものでしょうか。

樺太（サハリン）の終戦の思い出

北海道 南 潔

昭和二十年私は恵須取陸送株式会社の自動車運転手として勤めていた。

八月九日夜半突如ソ連は陸、海、空の侵攻を開始した、そのために樺太は大混乱となり恐怖のパニックで、街中右往左往家を捨て家族バラバラ街を後に二十キロ余りの山奥の上恵須取へと避難した。

ソ連機は其の町民避難の長蛇の列へ巡回反復機銃掃射を行い多数の死傷者を出し、国道上は、正に阿鼻叫喚の巷と化した。

私は軍命令で急遽、防衛隊輸送隊員となり其の日から連日連夜避難者の輸送食糧確保の為、街から或は食糧営団の倉庫から東海岸へ通ずる内恵道路を三十キロ余りを隔てた白雲峽へ往つたり来つたり「ピストン」輸送を行った。

上恵須取で一休みしている所へ樺太師団豊原連隊区
の伝令「松尾少尉」が来た命令だ直ちに車を出し恵須
取防衛隊中隊長「中垣大尉」の許へ急行せよと言われ
た。

街の中は警防団、警察、防衛隊、防空監視所、女子
隊員、恵須取中学生等が要所く配置して警備して
いる誠に殺伐たる状況の中を中隊本部のある支庁裏の
防空壕へと向かった。

途中数回「ソ連機」の機銃掃射を受けたが、此の時
の空襲は特に執拗を極め自動車十数台死傷者二十人も
の甚大なる被害であった。

私の叔父も輸送隊長として行動中空襲を避け土手に
伏せている時運悪く機銃で死亡した。そんな状況の中
で命令をやっと伝達したが「一般住民が上恵須取へ避
難の終るまで、敵の上陸を食い止め玉碎覚悟で戦え」
と言うもので、大砲も弾丸も無く小銃と機関銃のみで
どうして戦えるのかと思った。

命令を伝達する「少尉」受ける「大尉」共に顔面蒼
白涙の状況であった。其の時「松尾少尉」から広島に

原子爆弾が投下され未曾有の死傷者を出したことを聞
いた。私はこの時点で日本は敗れると思った。未だ終
戦を知らされず、役目を果たし帰路についたが、又も
数回の機銃を受け避難しながら漸く上恵須取へと着い
た。

十二日以来殆ど不眠不休で心身共に疲れ果て車中で
仮眠をしたが再び軍の命令で起こされ町へ急行するこ
とになった。それは意外に我が軍の想定外で「ソ連軍」
が海外からの上陸でなく「塔路飛行場」方面より陸路
恵須取の山市街の「王子工場」へ突入日本軍防衛隊と
激戦中と連絡があり、それを知らず海岸方面を監視防
衛中の軍防空監視所女子隊員が背後を絶たれ全滅の恐
れがある、直ちに伝令と救援の行動となった。

兵隊十人と私は手榴弾を二発携帯二十キロ余りの国
道を警戒しながら市街へと向かう、既に日は暮れ真っ
暗闇の中「ライト」を消して進む、私の心中は不気味
と恐怖の複雑な状況であった。

「王子工場」裏迄到着「エンジン」を止め銃声は聞
こえぬか様子を伺っている時、突如道路脇の暗闇から

銃剣を持った兵隊五人が飛び出した双方共一瞬驚いたが幸いにも日本兵であったのでホット一安心、早速状況は如何にと聞くとソ連軍の部隊は薄暮に王子工場を占領し市街への道路は遮断、恵須取川・武士川の橋の防衛線は敵に落ち、更に浜市街へと逆に進攻中との事で軍監視隊員は山越しに迂回して後退、女子隊員から順次、上恵須取方面へ退却することになり、其の連絡誘導係として待機しているとのことだ。私は朝迄到着する隊員を待ち先着者から乗せ上恵須取へと帰った。

翌十七日昼、未だ終戦を知らず、恵須取陸送会社は本部を久春内営業所へ移転することになり私の車は総務課長と重要書類、現金等を持ち途中避難民の女・子供を乗せ珍恵道路を珍内經由久春内へと向かった。

久春内へ着いてみると意外と住民が落ち着いている何故かと聞くと、軍官から漸く正式に終戦が知らされ、去る十五日昼終戦の詔勅がラジオで放送されたこと聞き、全く腹の中が煮えくりかえる思いだった。私共は軍官から終戦を知らされず、全くつんば棧敷で必死の戦い、避難、逃避行を続け、其の様子は正に地獄絵だ

った。誰を恨み誰に此の怒りをぶつけたらよいのか、私共の其の悔しい心境は筆舌に尽くせない。

婦女子が優先で順次北海道へ引揚げることに、又会社の方針も変わるのので、再び課長と、上恵須取へ報告に引返したが、もう軍官の命令は支離滅裂途中で会社の専務・常務と会い状況を報告し、ここに至っては命令も統率もとれない。各々自由行動をとるようになると言う、この時点から私共は敗戦の虚脱と混乱の真只中へと突入した。

さて、軍及び会社から自由の身になって、私は家族親戚の者は、どうなったか気が付き心配となり、其の行方を探すために上恵須取を出発することとなった。

処々で訪ね聞くと私の家族、親戚一行は、会社のトラックで十七日夜半仮宿泊地の上布札から出発、珍内經由、留久志の小学校で一夜を明かし翌日は久春内へと着いている。私とは丁度、夜半に国道上で、すれ違いになったようだ。二十日に久春内へ出て調べると又一行は幸便を得て豊原、大泊方面へ南下した様子、それを追いかけて真縫山道を東海岸へ向けて走ったところ

ろ、途中連日の雨で洪水となり不通で、やむなく一時久春内へ引返し水の引くのを待った。

こんなこともあった。波止場の鉄道引込線に日本人の緊急避難の衣類を満載した貨車がいっぱいあった。

貨車を必要とする「ソ連軍」は日本人を使役に駆り出し、これらの荷物を全部倉庫へ運ばせた。私どもは「ソ連軍」に取られるより日本人同志だからとこれ幸いに皆着た切り雀だったので、使役の最中「ソ連兵」の監視の目を盗み、素っ裸になり、下はパンツ、靴下からシャツ迄二重、三重に身に付け、更に「背広、オーバー」を着込み、まるで相撲取りのような恰好で出てくる。樺太とはいえ、八月中は未だ暑い汗を流しながら、此のような行為を数回、繰返したこともあった。冬に向かつての備蓄をした。

ソ連の命令で全員元の仕事に復帰するよう命令が出たために又、徒歩の行軍が始まり帰宅して長い引揚げまでの生活が始まった。

私の十八歳の出来事

北海道 川崎 信道

昭和十四年八月、私は山形県沖郷小学校四年生の級友と別れて樺太栄浜に移住しました、というのも叔父が栄浜に住んでおり、叔父のすゝめで父が単身栄浜に先行し準備のできた頃、我々家族を呼び寄せたのです。

太平洋戦争も激しくなり、私が高等小学一年の時、父が召集されました。私も海軍志願をしましたが不採用となり、家の手伝いということになりました、青年壮年まで軍隊に入り町に残っている者は老人と女子供、其の中で若い年頭、いっとうなることかと不安の毎日でした。

ラジオ放送で終戦の詔勅を聞いた一週間も前八月九日に、国境からソ連軍が戦車を並べて攻めて来た、着の身着のまま手荷物程度で逃げて来る人、人、大混乱となりました。